

「吉野静」逍遙

味方 健

住所 京都市上京区寺町通今出川上る5丁目鶴山町2-19

「吉野静」（以下「本曲」と呼ぶ）は、その曲がらから作は古いと思われる。その曲名は、もと当然「静」であり、判官義経の愛人静御前の登場する曲が数曲出来て区別する必要が生じ、「静」の上には「吉野」「二人」「安達」「法事」などと形容詞的修飾語を付したことは、まちがいない。現に『風姿花伝』や『三道』や『申楽談儀』に見える曲名は、みな単称「静」である。観阿弥の油の乗り切っていたころ、得意芸として、幽玄無上の風体を見せたと『風姿花伝』の「奥義」や『申楽談儀』の序にいう「静」は、すでに多くの先学の指摘のあるとおり、おそらく本曲の祖型なのであろう。『三道』に「静」を「井阿作」とし、「静、本風有」という事情の解明については、さらなる資料の出現と、解明への作業を必要とするであろう。

ここに問題となるのは、『五音』上の「幽曲」のくだりに見える〈次第〉の位相である〔図版1〕。

静 亡父曲

次第 花ノアト、ウ松風ハ、く、雪ニヤシツカナラルン リヤク

〔五音〕—宗節転写本—

〔古典文学大系〕『謡曲集』（以下『旧体系』）の解題には、本曲の

古態にあったとし、「前ジテ」の「登場歌」だったろう、といい、「そのあと、今ワキの謡う第1段のサシ・上ゲ哥をシテが謡ったのだらう」という。わたしは、この〈次第〉を「二人静」の曲舞部分の冒頭に置こうという。「花ノアトトウ」を「花ノ跡訪フ」と読まれたのは能勢朝次氏で、表章氏もそれを踏襲されている。なるほど、花（桜）が春の闌けるにつれて、しだいに奥に移り、松の嵐がそれに替わるわけで、その花を訪ねて山に分け入るのであろうけれど、わたしは、「跡訪フ」に懸けて読みたいのだ。ここ吉野山に活路を求めて得なかつた愛人義経の跡を、静の霊が弔おうというのだ。死期の先後は、今は問うまい。ちょうど能本「屋島」において、讃岐の屋島の浦と長門の壇の浦とが混然となつていても、一曲のドラマトウルギーには毫も障らないのと同じである。すなわち、この〈次第〉は夢幻能にあつたと、わたしは読む。だからこそ、亡き人を弔う「朝長」にも流用されたのだ。そして、所が吉野ゆえ、「雪」は花の雪と解する人もあろうが、静がこの山で義経に放たれ、雪中をさ迷うた事情が揺曳するではないか。そして万葉では吉野の主要景物は雪であつて、花は見えぬ。以後、花のイメージが温ためられて、古今に至つて、俄然、吉野は花どころとなるのである。だいいち、「二人静」の前場に雪は重要な景物ではないか。「二人静」は、山中玲子氏ご指

摘のとおり、本来一人静であり、菜摘女に静の霊が乗り憑って舞う能なのであって、二人という呼称は、他に類曲も出来、二人の相舞物に様を変えてからのものである。この〈次第〉を曲舞の序に置き（菜摘み女が登場したときは、いまだ静はかわりないのだ）、フィナーレを「雪に吹きなす花の松風 静が跡を弔ひたまへ」と結びつき、〈次第〉との沓冠が、レトリックの妙ばかりでなく、一曲の舞台となつている吉野の劇的・詩的空間の構築に、より豊かに投影するのではなからうか。語彙の呼応は山中論の指摘するところである。

右のようなわけで、この〈次第〉は本曲の古態とは切り離したい。そして、「静が舞の能」は本曲の祖型と考えるが、その風貌への遡源や「本風あり」の事情への切り込みは、このたびは控えて、「吉野静」として、現行型が確立してからの流動の様相を見てみたいと思う。

## 二

本曲の曲名表記は古来いくつがある。吉野静が多いが、「芳野静」「芳野閑」「吉野しつか」「吉野司士」などと書かれている。これらの曲名表記は内容にかならずしも関わるものではないから、いま、いちいち紹介しない。

古来行なわれる本曲の形態は、大きく二つに分けることができる。前場を有するものと前場のないもの、すなわち複式と単式との二型である。だいたひ下懸りは複式、上懸りは単式を伝えるが、金剛は下懸りながら、いま単式である〔図版2〕。金剛の古写本を渉獵する暇を持たなかったが、他日、同流の古態を吟味してみたい。同流は「加茂物狂」の前場をも脱している。本曲の場合は、中絶時代があるのかもしれない。

本曲の演式としては、現在の金春・喜多のものが、充足している

〔図版3〕。現在手近に見られるものは「旧体系」で、校異欄を参照しながら、諸流の本文と脇・アイ狂言をも含めて充足した本文を知ることができる。野上豊一郎編「謡曲全集」第二巻所収の本曲も、金春流の本文に大藏流のアイ狂言を番わせ、その芸の細かい組版の助成もあつて、立体的に本曲を把握することができる。

充足型の代表的なものは、一般に「車屋本」と称せられる鳥飼道断刊行本で、その書誌学的研究は、川瀬一馬・表章二氏ほか、幾人もの先学によつてなされている。この金春系謡本は、おおむね、ワキ佐藤忠信の

定なき世は中／＼に、定なき世は中／＼に、うきことやたのみならむ

——法政大学能楽研究所（以下「能研」）蔵、野上豊一郎博士旧蔵「車屋本」——

という〈次第〉に始まる。まさに無常流転の命運に弄ばれて来た義経の郎等として、「憂きこと」のあい継ぐのが世の常なのである。この「定めなき世は」は、他本に「の」ともある。内組が天和元年、外組が貞享三年に刊行された「六徳本」（西森六兵衛・吉田徳兵衛連名の刊行が主なので、俗にこう呼ぶ〔図版4〕）は、当時の金春系謡本としては、従前とはすっかり粧いを改めた、観世本スタイルの謡本（字体が近衛流、「シテ」「ワキ」等の表記がカタカナなど）なのであるが、はじめて強・和の吟を弓・禾の省文で表わした画期的な謡本でもある。金剛が独自の刊行本を持たず、「宝永戸倉屋本」に混在する喜多流節付のものも不徹底で（表章氏「鴻山文庫本の研究」五二〇頁）、実際には喜多独自の刊行本もないに等しかったため、下懸り一般からの需要が多く、吉野天河弁財天社の大夫家柿坂氏方に伝わるもの、備前池田家旧蔵で現在岡山大学に蔵せられるもの等、あちこちに残されている。先年、奈良の金春家でも拝見したのは、

表章氏が前掲本（五〇七頁）でご指摘の外組奥付の「南都住」の辞句とともに天和〜元禄年間、八郎即夢の大夫時代の流儀正本であったことの傍証になろうか。事実、喜多の本文や節譜に改めた同本も往々あり、まさに奥書にいうように「下掛之音曲」のテキストとして汎く用いられた。本文は、ままた車屋系と異なるものが見られ、むしろ喜多と符合する箇所もあるのだが、この本の本曲が「定めなき世の」なのだ。喜多健忘斎古能が刊行したと考えられる素姓正しい同流の初の謡本「喜多流安永版」、その外組で健忘斎の名を識す「喜多流文化版」は、以後、同流百年の経典となるのであるが、この「文化版」にはを用い、以降、現在に至るまで金春がの、喜多がはとなっている。

本曲の現存する最も古い本文は、法政能研蔵の「金春元安（注、禅鳳）筆卷子本」であるが、これにはワキの〈次第〉がなく、〈名ノリ〉で始まっている。「定めなき世……」は「蟬丸」の冒頭、勅命で逢坂山に捨てるべき皇子蟬丸（ツレ）を伴ったワキ清貫一行が謡う〈次第〉と同文で、いずれかが、いずれかの代入であるが、本曲の元安本にこの〈次第〉がなく、車屋系本曲以後になって、下懸りに定着する事情から見れば、本曲は古曲ながら、やはり「蟬丸」の〈次第〉が先行するのではなからうか。しかし、車屋本以降、ずっと〈名ノリ〉はなく、〈次第〉から〈サシ〉に直結する型となるが、「喜多流安永版」に至って、〈次第〉〈名ノリ〉〈道行〉という小段完備型が生ずる。観世流節付の「樋口本」〔未刊謡曲集〕三所収）がそうであるが、これも文化・文政ごろの筆写とされ、この型の成立したとい、そう古いものではなからう。つまり、〈次第〉〈名ノリ〉〈サシ〉という型の成立年代が江戸後期まで降ることを、逆に物語っているように思う。

三

では、本曲の前場が切られるのは、いつごろなのであろうか。本曲に前場がないと、まことに舌足らずで、一曲の構成として、まったく要領を得ない。前場があつてこそ、衆会をうながすにわかの際の音が生きるのであり、アイの存在もワキとの問答も意味があるといえよう。しかるに、かなり早くから、そして車屋系にまでも、吉川本のごとく省略型が現われるのだ。

観世流に伝存する本曲の最も古いものは、観世文庫蔵の「宗節筆卷子本」〔図版3〕である。宗節は七世観世大夫で名宣は元忠、一安斎と号した。天正十一年（一五八三）没、行年七十五歳。几帳面なたちで、いくつもの世阿弥伝書を書写し、自身の大夫在任中の天文十一年（一五四二）に火災に逢って父祖の資料を失ったこともあつてか、謡本もかなり努力して書き残している。本曲の写本は、世阿弥流のカタカナ書きで、すでに

ワキ詞 是ハ都道シヤニテ候カ……

と、ワキ忠信とアイ吉野郷の者との問答に始まる型である。この型は、こののち観世流の本曲謡本の定型となり、二十四世左近の昭和版まで、明和本施行の九年間を除き、四百年に亘って踏襲された。

下懸りで前場を脱している最初は、現在発見されているかぎりでは慶長十一年の年記のある法政能研蔵「岩本秀清節付下懸り謡本」で、ワキの〈名ノリ〉があつて、そのまま、アイとの問答の最終部のワキの詞の「当山を信じ参る上は、いかにも御寺も宿坊も……」となる型で、しぜん〈念誦文〉はなく、「御はからひの……」の同音となる。この点は「吉川家旧蔵車屋本」も同様で、アイの出の貝立<sup>④</sup>でや、ワキ・アイの問答を跨いでしまうので、アイの出る幕がない。これは同本が能本でなく、謡本であるゆえで、京大蔵の近世初期の下懸り節付本本曲の曲末に付記する替の分も同工であるが（本の分

は、〈次第〉〈サシ〉〈上歌〉に始まる充足型)、こちらは「衆徒の僉義を聞はやと存候」のあとに「シカく」とあつて「かやうに申八都の者……」とワキ・アイの問答の最終部になっていて、単式ながら、シナリオとしてややましである。架蔵「六徳本」第一丁の袋部に差し込んである紙片も、同じくワキの〈名ノリ〉の終が

衆徒のせんき有由申候程に。立越へ聞はやと存候。

となり、「シカく」とアイの入る由をしるす〔図版4〕。すなわち義経追討の僉議に人々を集めるアイ二人(吉野蔵王堂の衆徒に使われる者ども)の貝立ての出(前出)があり、二人は着座し、その間にワキが割り込み、

シテ(注、オモ)是成人ハ此吉野拾八がうのしゆ糸の中糸何とした事  
是に居さしますぞ。た、しめ。(貞享松井本)

といわれ、

是ハ都道者にて候。

と、アイの詰問に対するワキの言い分けとなっている。因みに「都道者」とは都から熊野詣でに赴くツアである。能として、前場を略した型で演ずるとならば、まずこの形しかない。

能として、ワキの出る場合は、最小限これだけの部分は備えなくてはならない。しかし、謡本としては、〈名ノリ〉も脱した「宗節巻子本」の型が、先述のごとく観世流の、そして宝生流の本曲謡本の定型となつて行つた。十三世観世大夫滋章の巻末の極めを信ずるならば、観世小次郎信光筆の謡本(法政能研蔵「伝観世小次郎信光筆謡本」)、鴻山文庫蔵「長頼奥書百番本」、同蔵「室町末期筆堀池淵田本」、能研蔵「石田少左衛門盛直節付本」など、いずれも冒頭に「しかく」と注し、「是ハ道たうしや……」と始まっている。

前場省略型の本文系統は、およそ二通りに分かれる。一つは、このように、いきなり「これは都道者にて候(が)」と始まるもの(か

りにA型)と、いま一つは、ワキの〈次第〉(有無両様)〈名ノリ〉とあつて

南無蔵王権現。我君のゆくゑ安穩に守らせたまひ候へ。(架蔵  
「天和三年山長本」朱書人)〔図版5〕

と〈念誦文〉あり、「これは都道者にて候……」となるもの(かりにB型)とである。

架蔵の「天和三年山長本」(中本)、「元禄三年山長本」(半紙本)は、いずれも、いきなり「これは都道者にて候」で始まるA型であるが、両本ともに朱の書き込みでB型をしるす。そして両本多少異同があるが、アイとの問答の一部を省略する指示がある。けだし、素謡用のテキストとして用いられるのであろう。江戸期の明暦以後の「百番之外の百番」、すなわち、いわゆる外百番は、演能記録に見えるものを含みながら、かならずしも家元の校閲を受けてはいない開板と思われるが、この二本に収める本曲は、「宗節筆巻子本」以来の形として、観世流の家元公認本「吉野静」のベースになっている。

この系統はともかく、観世で十三世滋章がみずからの意志で刊行した正徳六年(一七一六) 弥生の百番(「正徳弥生本」——イ本)、享保年間十四世清親刊行の百十番(同——ロ本)、寛政十一年(一七九九) 十九世清興刊行の外六十二番の補いとして、二〇〇番にすべく、天保十一年(一八四〇) 年記で刊行されている別組二十八番は、主として明和新改正本の外組に元章が組み入れ、安永三年(一七七四)に廃された曲どもの復活であつたが、その本曲はかならずしも明和本型ではなかつた。本曲は、後に触れる明和本の充足型をまったく廃して、天和・元禄外組の省略型をベースとし、辞句の少部分に明和本の影響が見られる程度である。先述のごとく、このA型は二十四世左近によって、現行大成版のB型に改められるまで、長く流儀正本の本文となつた。



宝生も〈念誦文〉のないB型を伝えているが、冒頭の〈次第〉〈名ノリ〉以外は、奇しくもほとんど「宗節筆卷子本」の通りで、のちに観世が明和本の辞句に改める細部も同本に同じい。本曲一曲では決定的なことはいえないが、上演頻度の非常に低い曲の場合、同じ上懸りの観世・宝生は共通の本文を残すのかもしれない。

金剛も単式で、〈次第〉なく、〈名ノリ〉に始まり、ワキとアイの間答「是は都道者にて候」に続く「凶版<sup>2</sup>」。本文は観世・宝生とさして変らない。ちなみに金剛の座付脇である高安流の本文（和泉太郎筆『高安流謡曲集』全）を見ると、さすがに金剛本流と同型で、はじめのワキの〈名ノリ〉の詞に小異を見る程度である。

#### 四

本曲の〈イロエ〉アト、〈サシ〉前に、本来〈クリ〉はない。しかるに後出の関大『新』生田文庫本や「喜多安永版」には〈クリ〉がある。「砧」に「湯谷」のごとくツレの〈次第〉を付加して章段の形式上の完備を計ろうとする同流の意識傾向である。<sup>5</sup> 架蔵の「六徳本」の上欄外に墨の書入があるのは、「ます」（六徳書入）、「まし」（安永喜多）の一字の違いはあれ、喜多の節譜や辞句に訂正しているところから見て、喜多のものと見てさしつかえないだろう。

序 夫神八人の尊ふに依て威をまし。人ハまた神の加護によれり

（喜多安永版）

これは明らかに「巻絹」の〈クリ〉の代入である。

後出の関大『新』生田文庫本は「また」がなく、「加護」が「とく」になっている。「巻絹」は「また」がなく、「加護」である。関大『新』生田文庫本は「しんのとく」と仮名表記するゆえ、頭部の「神」もカミでなく、シンなのであろう。

#### 五

「明和新改正本」は全体に互って大幅に改訂・改竄を施したことで特殊な本であるが、その極端な変容は、上は改訂者元章に学んでいた將軍家治から、能役者たち、市井の趣味として謡をたしなむ人々まで、すべて抵抗を感じ、元章没するや、忽ち公儀の意向が主ながら、職方の意志であるかに粧って古来の形に復元された。<sup>6,7</sup> それほど新改正は強引で極端であった。しかし、こと本曲に関してのみ、わたしは新改正本を評価する。

同本の本文構成は、のちに掲げる諸本の本文小段部分を対照した一覽表をご覧いただきたいが、その概様を紹介すると、まず冒頭シテ静が「次第」で登場し、〈次第〉〈サシ〉〈上歌〉を謡うのだ。小林静雄氏が、静が謡ってこそ生きる登場詞だと語っておられるのを、かなり以前に読んだ覚えがあるが、いま、その出自を求めえないのが、残念である。〈次第〉はさきに触れたが、静でも忠信でも通用する内容である。

しかし、続く〈サシ〉の心理的発想と情念は、絶対ぬしの身の上を想う静御前の女心でなくてはならない。田中允氏は、これもあり、また「樋口本」の「芳野静前」を国学院本第二種を用いて校合・補完された経験もあって「未刊謡曲集」三―ワキの〈次第〉〈名ノリ〉〈念誦文〉とあって、シテの〈サシ〉「実や譬へても……」に続く、同集十七の「観世本」「芳野静前」の校訂で、ワキの〈次第〉に続く〈サシ〉に「シテ？」と補っておられるが、〈次第〉にワキという指定があるのなら、続く〈サシ〉もワキ、もし、〈サシ〉をシテに謡わせるのなら、〈次第〉もシテであるはずである。ただし、「観世本」は特殊型で、それに続く「三芳野の……」の〈上歌〉が同音なのだ。

いま、わたしの吟味しているのは、早稲田大学演劇博物館蔵の明和

本で、同本が廃されてほど遠からぬころの書き込みがある。

まず見返しに

頭書ノ仕舞付ハ古ヘヨリ今ニ用ル也 左近元章次第ヲ拵ル 今不用也 頭書ノ通ワキ名乗テ致候ヲヨシトスル也

とあり、第一丁表、すなわち冒頭部の上欄外に「吉野静 脇名乗」として、他本と同工の詞を記し、その続きに次のごとくある。

如斯名乗て後見座へ行居ル 狂言出テ酒盛ヲスル時 脇笠ヲ手持 是ハ都の者にて候御免あれト出テ通ル お暇申ト云テワキ座へ行居ル

シテ謡立 貞ニ扇アテ文答 衆徒モイキトヲリノ時ワキ座へ行下 二居

名乗ナシニモスル也 右ハ権右衛門方也 源七方ハ次第有 名乗 忠信名乗 都道者ニ紛れ衆徒ノセンキヲ聞フト云時太コ座ヘクツロキ狂言出ル—以下略—

なおシテは大口でなく腰巻とする。「勝手の御前に参りけり」の〈中人リ〉のくだりの上欄外の書き込みが本曲前場存廢の事情を語っている。すなわち、

次第より此所迄ハ古ヘハ無之故能モ不致候 此仕舞付ハ古ヘノ通也 今ハ是ヲ用也

そして、脇の「是ハ都道者にて候」の頭部に△印を施し、上欄にいう。

△古ヘハ是ヨリ板本ニモアリシヲ元章新改正より前アリ 今ハ古ヘ江カエリ候ニ付前ハ不用

其為に脇名乗ノ詞ヲ初ニ記置也 前ノ名乗詞ヲ不用也 さて、さきに〈クリ〉のことであつたと触れたが、過般、コ

レクターの生田秀昭氏方から関西大学図書館に収まった『新』生田文庫』を、関屋俊彦教授の好意で瞥見する僥倖を得た。そ

4	3	2	1	
能研	鴻山	能研	能研	所蔵者
春	春	春	春	流儀
野上博士旧蔵車屋本	毛利家旧蔵車屋本	下間家旧蔵車屋本	金春元安筆卷子本	伝本名
○	○	○	×	次第
×	×	×	○	名アリ
○	○	○	○	サシ
○	○	○	○	上歌
○	○	○	○	問答・忠信・
×	×	×	×	念誦文
○	○	○	○	中人地
○	○	○	○	問答・忠信・
×	×	×	×	クリ

「吉野静」諸本小段部分有無対照表

が あつてアイが出、ワキと問答。ただ、これからあと、シテ・ワ

「実やたとへてもうきハカハラぬならひとて。其いにしへは清見原の」の二句を一人で謡うはかは、〈次第〉〈サシ〉〈上歌〉が「二人」の連吟であることだ。これは義経記の伝える都へ送還される静に付けられた供まわりの侍か雑色かで、ちょうど上懸りの「朝長」で、宿の長に従う太刀持ちのトモのようなものではないか、とわたしは推定する。

本書の特徴は、まずシテ静がトモを伴なつて登場し、〈サシ〉の「丸狸々」とあつて、完曲を記すのも、「狸々」が単式であることを常型とすることを前提とした表記で、丸とは、まるまる、一番、前場を完備するの意である。

同本は観世流節付の充足型で、タイトルは該本書写当時本曲が前場を脱したものを常型としていたことを語っている。本曲の次に「丸狸々」とあつて、完曲を記すのも、「狸々」が単式であることを常型とすることを前提とした表記で、丸とは、まるまる、一番、前場を完備するの意である。

キ・同の指示をおおむね落としている。

次の特徴は、さきに〈クリ〉のくだりで触れたごとく〈クリ〉を備える点である。文字といい、料紙といい、風貌といい、けつして新しいものではないが、瞥見しただけなので、成立時代については何ともいえない。

次に吟味した諸本の本文構成を一覧表にして掲げる。

六

はじめにいったように、この稿は本曲が「吉野静」として確立してからの諸形態を諸本によって吟味するのを立て前としているもので、世阿弥伝書に断片的に散見する古態「静」をめぐる経緯の考察はしなはずであるが、古態やそれにまつわる作者を考える一つの手だてとして、〈クセ〉の性格を見ておきたい。

観阿弥が曲舞を猿楽能に導入する以前に本曲の祖型が出来ていたとするならば、それには曲舞部分が多かつたという小林静雄氏の説が今に伝えられている（『謡曲作者の研究』所収「観阿弥研究」）。

本曲の〈クセ〉は舞をともなう叙事性に特調がある。〈サシ〉を含んで〈クセ〉の演ぜられねばならない目的は、義経をすこしでも都近くまで落とすための時間をかせぐべく（元章はその点を強調する「応変（之）舞」を創始している）、当世随一の美人白拍子静の舞を見せることが一つ、その舞の中で、義経は公明正大で、何のやましい点もないこと、やがてこのあたりは義経の続べる所となるであろうこと、もしいま義経を追討しようとしたとて、片岡・増尾・鷲尾・忠信（じつは忠信は都から

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	
	観	観	観	観	観	観	観	観	観	能研	架蔵	架蔵	架蔵	架蔵	能研	能研	能研	能研	鴻山	鴻山	鴻山	観世	能研	架蔵	架蔵	架蔵	架蔵	架蔵	架蔵	京大	鴻山		
宝	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	観	剛	喜	喜	春	春	春	下	春		
宝生流昭和版	観世流大成版	天保山長版昭和版	同墨書入	明和新改正本	「新」生田文庫色変り本	「又」トシテ記ス	同「又」トシテ記ス	同「又」トシテ記ス	同「又」トシテ記ス	同「又」トシテ記ス	同朱書入	同朱書入	元禄三年山長本	同朱書入	天和三年山長本	下村識語本	石田少左衛門節付本	岩本秀清節付本	小宮山元政筆本	堀池・淵田本	室町末筆長頼本	宗節筆卷子本	伝小次郎信光筆本	明治金剛流枕本	喜多六平太本	喜多流安永版	現行金春流	同袋部分挿込	六徳本	同巻末付記分	近世初期写本	吉川家旧蔵車屋本	
	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

所蔵者略記説明。

- 能研 野上法政大学能楽研究所
- 鴻山 同鴻山文庫
- 京大 京都大学大学院文学研究科図書室
- 観世 観世文庫（観世宗家旧蔵）
- 関大 関西大学図書館蔵「新」生田文庫
- 演博 早稲田大学演劇博物館

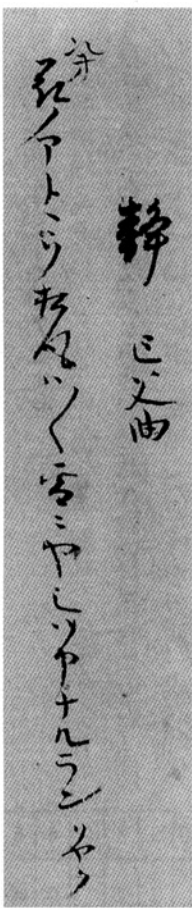


の熊野道者に化けて、ひそかに吉野山に残り、衆徒の中に隠れている」といった一騎当千のめんめん<sup>めんめん</sup>に返り討ちに会うであろうことをいい、義経追討断念を説得することが、いま一つである。いくぶんか、その詞章の座標は異なるが、戯曲上、もつとも重要な人物のことを叙するのを舞の内容とするという点では、「二人静」「千手」が挙げられよう。「千手」ははっきり禅竹作、今の「二人静」には、やはり禅竹の息がかかっているように、わたしには思われるのだ。

注

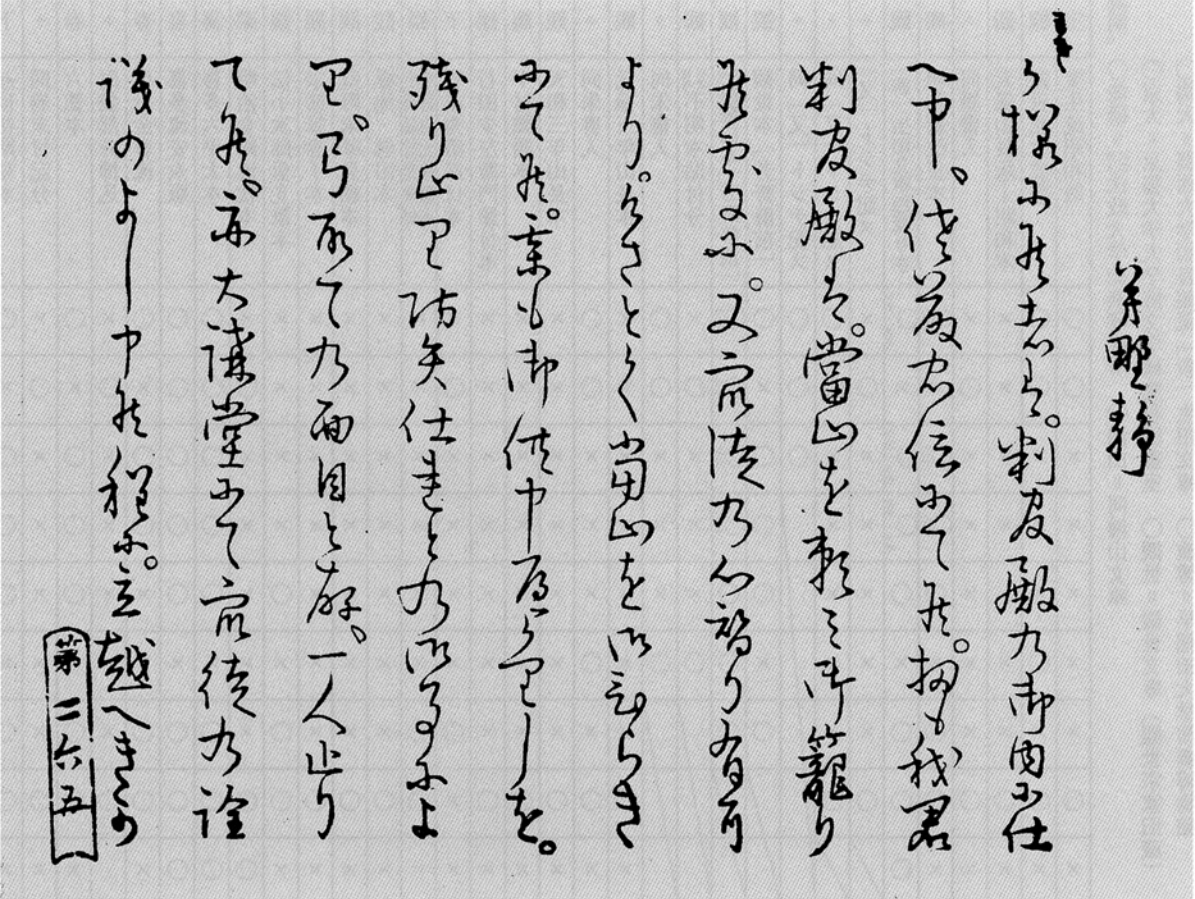
- (1) 『世阿弥十六部集評釈』(岩波書店)。
- (2) 『日本思想体系』(岩波書店)『世阿弥・禅竹』所収『五音』。
- (3) 『能の演出 その形成と変容』所収「二人静」の古態―(二人静)の可能性をめぐって―(若草書房)。
- (4) 『吉野閑何處狂言榜にて出ル也 二人つうわひく』(貞享松井本)。  
カイ吹マシテ出ル也
- (5) <sup>つれ次第</sup>旅の衣の遙くと。旅の衣の遙くと。芦屋の里に急がん  
(喜多文化版)「砧」
- (6) 『能楽史新考 Ⅱ』(わんや書店)所収「明和本廃止の事情」。
- (7) 古曲に戻った本曲も、従前の「衆徒も憤りを忘れけり」「義経を守りたまへと」「おほかた舞のおもしろさに」を「時刻や移すらん」「わが君」「あまりに」と明和改正の辞句を採用する。
- (8) 『芳野静 応変舞』(明和 四丁 亥十月 観世大夫) (鴻山文庫蔵)『習事伝授書留』。

図版1 『五音』 観世文庫蔵(観世宗家旧蔵)「宗節転写本」(観世宗家蔵版・能楽頒布会発行のコロタイプ版に拠る)



図版2 金剛流「芳野静」(金剛直喜改訂明治枕本)

(三三)

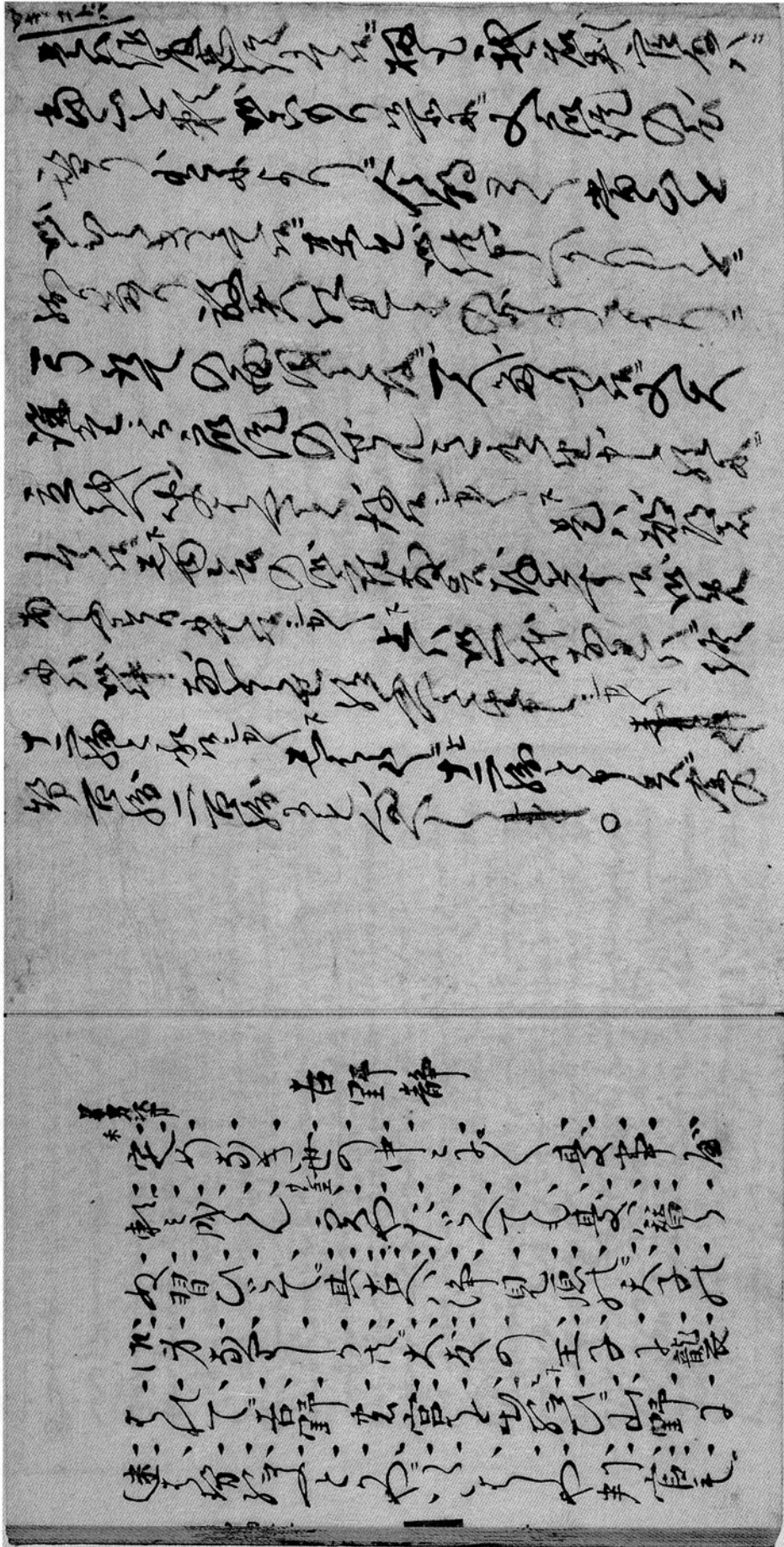


第二六五





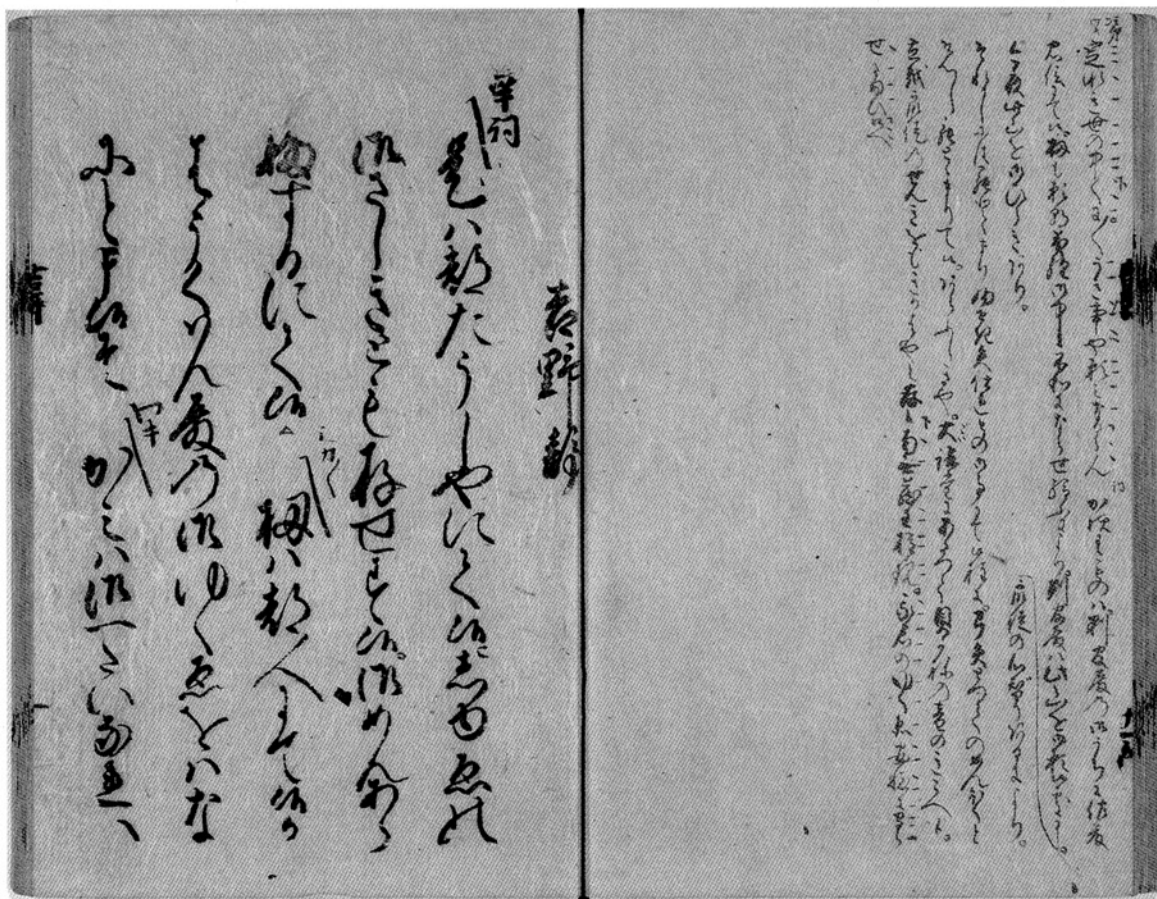
図版 4 六徳本「吉野静」第二丁と挿込紙片



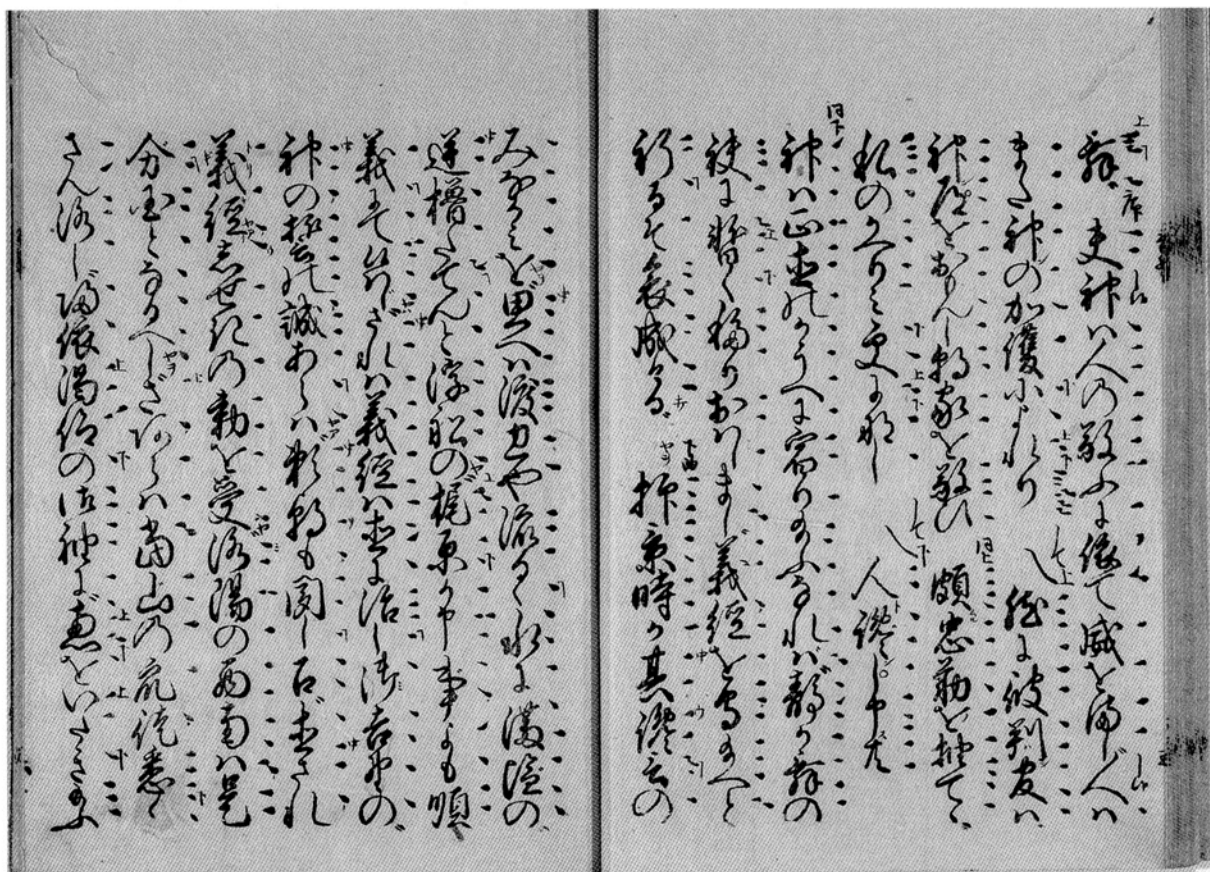
(四三)



図版5 天和三年山長本「芳野静」と朱書入



図版6 喜多安永版



(三三)